

円筒分水の妙 — 双方ガマン、ガマン —

(特非) シビルNPO連携プラットフォーム 理事
株式会社熊谷組 相談役 宇奈月観光大使

大田 弘



双方ウィンウィン (Win-Win) という考え方がある。ビジネスモデルなるものを構築する際の魅力的なおまじないフレーズとして使われることが多いようだが、私は余り好きな言葉ではない。

独り勝ちを戒めた、近江商人の「三方良し」に似通っているようにも見えるが、三方良しには痛み分けも含まれているし、個々のウインではなく社会全体の繁栄（経済的なことのみを指すのではなく）や穏やかな暮らしが最終目的になっていると私は理解している。

片や、双方ウィンウインは双方が儲からなくてはならない。従って、自己の直接的な利益や目の利益に関心が集中し、例えば共同体として必要なことだと思っても、それには協力はしないことになりがちとなる。言い過ぎかも知れないが、人間の強欲をかきたてるようなフレーズだとすら感じてしまう。

さて、日本の農耕経済が発展する過程で、各地で死傷者が出るほどの激しい水争いが多く発生した。明治時代に入っても依然としてそれが続いた。一つは取水口を巡る争い、もう一つは水の分配を巡る争いだ。

我が故郷、富山県には黒部川などの多くの急流河川があり、低地では洪水により田畑が流出し、高台では干ばつで生命の危機にさらされ続けてきた土地柄である。それが今では日本を代表する大穀倉地帯に変貌を成し遂げた。

江戸初期頃から、石高を上げようと前田（加賀）藩政下で積極的な新田開発が始まった。特筆すべき開墾は日本一美しいとされる黒部川扇状地における改作事業である。この川はかつて四十八ヶ瀬と称されるほどの暴れ川で河道が定まらず、金沢から新潟県糸魚川・長野経由（現在の北陸新幹線ルート）の参勤交代にあたっての大難所でもあった。また、右岸の旧扇状地の河岸段丘には雲雀（ひばり）野と言われる広大な荒高台が広がっており、かつては黒部川の水の恩恵を受けることが出来ず、僅かな沢水を使った煙草栽培・雑穀栽培などで必死に生きていた。



写真-1 黒部川扇状地全景

現在では 100km² の扇状地には延べ 100km に及ぶ用水路網が張り巡らされ、安定的な農業用水・生活用水・融雪用水などの供給が計画的に出来るようになり、争いも消滅した。先人たちの努力は昭和 50 年代まで続けられた。約 380 年間に及ぶ苦闘であった。

また、この用水を守り抜くために田植え前には「江ざらい」と呼ばれる修復作業が地区全体の共同作業として行われている。そして、小学生の社会科の授業で用水路ルートの見学や水争いをなくすための仕掛けを学ばせ、先人たちの偉業を後世に伝えている。

円筒分水”をご存知だろうか。先人たちが考えた究極の水分配の知恵である。“1”箇所湧き出る水が“3”箇所の用水路に向って均等に流れて行く仕掛けである。

3地区が共同で取水口を集中化・大型化することで安定的な取水が可能となり、身勝手な水の奪い合いが無くなった。これによって、水が豊富な時の恩恵は、3地区が均等にウインウインとなる。最大の妙は水が少ない時には、これまた3地区が均等にガマンガマンとなることだ。我田引水への欲望が穏やかに消滅したのだ。

私はこの円筒分水を見ていると、何ともいえない人間の美しさ、素晴らしさを感じる。先人たちの智慧に頭が下がる思いで一杯になる。

双方ウインウインは双方ガマンガマンがあってこそ成り立つ。事の最終目標が社会全体の繁栄にあってこそ、それが成り立つと思える。

経済学者の宇沢弘文氏（著作「経済学は人びとを幸福にできるか」）は、「経済学の原点は人間、人間でいちばん大事なのは、実は心。その心を大事にする。一人一人の人間の生き様を全うするのが、実は経済学の原点でもある」と説いている。そして自然環境や社会的インフラ設備は単純な市場原理にさらしてはならない社会的“共通”資本として捉えるべきだとしている。

私はこの言葉に大きな感動と共感を覚える一人である。と同時に流行（はやり）の持続可能な開発（sustainable development），“持続”とは何を指すのか？に対する答えを見出せていない。忘れ物探しの巡業が続く。



写真-2 十二貫野用水 江ざらい（黒部市）



写真-3 十二貫野用水“分水”の仕組み授業（黒部市）



写真-4 東山地区円筒分水（魚津市）